

## 父の思いと言葉を胸に 精いっぱい生きていく。

白河教会 山口友康さん

山口友康さんは、高校卒業後に保育士を目指して専門学校に進学したが、勉強に身が入らず漫然と過ごし、卒業はしたものの就職せずに実家へ戻った。母親に急ぎ立てられて鉄工所に勤めるが、遅刻や無断欠勤を重ねる有り様だった。そうした姿勢は子供の頃からのもので、勉強をせず遊び呆けているたびに父に叱責されるが、いつしかそれに慣れ、反省の色さえも失っていた。あるとき、突然部屋に入ってきた父から、いつものように厳しく咎められると思ったが、意に反して表情は穏やかだった。父は息子を案じ、関わり方を摸索し続けていた。そうして得た答えが、頭ごなしに叱るのではなく、息子を尊重し最後まで話に耳を傾けることだった。父の変化に戸惑いを感じながらも、初めて二人で向きあった時間。父が部屋を出ていったあと、言葉を反芻すると、「なんとか立ち直って欲しい」という心からの叫びのように感じ、後悔と感謝の念が胸に迫ってきた。それは、本気で変わることを決心できた瞬間だった。その後、会社に復帰。「何事にも精いっぱい向きあう」という誓いを胸に、充実した日々を送っている。



## 時間の浪費

私たちは、たとえば一日じゅう寝転んで無為に時をすごすことを、時間のむだ遣いといったりします。わずかな時間も惜しんで何かに打ちこむ。それが有意義な時間の使い方であり、時間の浪費は人生のむだに他ならない。と。ただ、時間の浪費というものを天地自然に照らして考えると、時間そのものに縛られない、もっとゆつたりとした大らかな視点がありそうです。

私たちはみな「この世に願って生まれてきた」と、法華経ほけきょうにあります。しかも、それは多くの人の幸せのために、と説かれています。つまり、私たちは調和の世界の一員として、みんなが幸せに生きられるよう、その調和を保つために生まれ、かつ生かされているということ。すると、人を傷つけるような言葉や態度、自分さえよければいいといった身勝手な行ないは、何よりもむだな時間の使い方といえないでしょうか。

日本はいま、ちょうど草花の萌え出づる春を迎えています。その草花を愛で楽しむことは、命の不思議や無常を観じる感性にも通じます。それはまた、いまを精いっぱい生きることの大事を知る機会でもあるのです。

# 立正佼成会